京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（ 3 年計画の 1 年目）

1. 研究課題

オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築

Reconstructing Post WWII Japanese Film History through Oral History Archives

2. 研究代表者氏名

谷川建司

TANIKAWA Takeshi

3. 研究期間

2016 年 4 月 - 2019 年 3 月（1 年度目）

4. 研究目的

日本の映画研究は美学・文学といった人文科学系研究者による映像のテクスト分析の手法に偏っており、映画を産業として、あるいは文化制度・文化政策・観客に対する効果といった社会科学的関心から研究対象として扱うアプローチが不足している。映画は芸術である以前に“興行”、即ち娯楽として発達してきたものであり、その作品がいかなる形で作られ、あるいはそれがどのような切り口で観客に提示され、いかに受け取られたのかという側面も同様に重要である。映画の作り手には監督や撮影監督以外にもスクリプター、殺陣師、美術等様々なスタッフがおり、更に配給・宣伝担当、劇場スタッフ等多くの関係者がいる。受容する主体としての映画ファンの存在も重要である。本研究は様々な形・多様な経路で映画文化の創出に携わってきた人たちの経験を参照可能な形にアーカイヴス化する作業を通じて、映画文化発展の特質を社会的・経済的側面に着目して解明することが目的である。

5. 本年度の研究実施状況

三年計画の初年度である本年度は、まず年度初めの 4 月 30 日（土）・5 月 1 日（日）の二日間の日程で第一回研究会を開催、初日には、本研究会で集積していくオーラル・ヒストリーというものが映画文化の創出に関わったあらゆる側面の人々に及ぶべきだという実例を示す形で、代表者である谷川建司が「いちエキストラが観た黒澤明の撮影現場」と題した発表を行い、二日目には今後の研究会の在り方についての議論を行った。その結果、次回以降の研究会は原則として二日間とし、土曜日にはゲスト（主として映画が完成してから観客の目に触れるまでの段階で何らかの形でかかわった人を中心とする）を招いて共同でインタビューを行い、日曜日には研究発表なり議論なりを行っていくこととなった。

第二回研究会は 8 月 6 日（土）・7 日（日）に行われ、初日には伊藤政昭氏（京都映画センター顧問）をゲストに迎え京都における映画の鑑賞運動・上映活動・製作活動の歴史についての話を伺い、翌日はそれを受けてさらに今後の具体的な方針について議論を重ねた結果、伊藤氏もエキストラの手配などにかかわったという、京都府・京都市が著作権を持つ時代劇映画『祇園祭』（1968 年）という作品のことを研究会として調査していくこととし、メンバーが持ち回りで次回以降の研究会の二日目に報告を行っていくこととなった。
第三回研究会は 9 月 23 日（金）の一日のみの開催とし、ゲストには東映で長年ポスターなどの惹句を担当してきた関根忠郎氏を招き映画会社の宣伝部の仕事について学んだ。また、メンバーのために京都では京都文化博物館、東京は国立近代美術館フィルムセンターの協力を得て『祇園祭』の試写を実施した。
第四回研究会は 11 月 12 日（土）・13 日（日）に開催され、初日には東宝系列の伊丹グリーン・ローズ劇場で特撮映画祭を企画・運営してきた山富真治氏を招き、興行の現場の立場からの話を伺い、二日目には木下千花（京都大学）、須川まり（奈良県立大学）の二名が『祇園祭』に関する報告を行った。
第五回研究会は 1 月 21 日（土）・22 日（日）に行われた。初日には近代映画社で雑誌「近代映画」の編集者として映画会社やその所属スターと接してきた小杉修造氏をゲストに迎えて映画会社とファン雑誌の関係について話を伺い、二日目には板倉史明（神戸大学）、木村智哉（明治学院大学）が『祇園祭』に関する報告を行った。
年度末の 3 月 15 日には研究会の一環として京都文化博物館と東映京都撮影所（および太秦資料室）を見学し、オーラル・ヒストリー・アーカイヴスや『祇園祭』に関する資料をはじめとする映画関連資料の調査を行った。

7. 本年度の研究実施内容
2016-04-30　第1回研究会（1日目）
いちエキストラが観た黒澤明監督の撮影現場――『乱』のクライマックス（三の丸炎上）シーンの撮影の様子についての証言
　発表者　谷川建司　早稲田大学

2016-05-01　第1回研究会（2日目）
研究会の 2016 年度の活動計画と 3 年間の長期的な活動計画について、研究会の運営方針について
　発表者　谷川建司　早稲田大学

2016-08-06　第2回研究会（1日目）
伊藤正昭氏（京都映画センター顧問、株式会社シネマワーク顧問）へのインタビューと質疑応答
　発表者　伊藤正昭
　司会　谷川建司　早稲田大学

2016-08-07　第3回研究会（2日目）
前日のインタビューのまとめと次回の予定について。本研究会の今後の進め方について
　司会　谷川建司他　早稲田大学

2016-09-23　第3回研究会
「コピーは生き物」：関根忠郎氏インタビューと質疑応答
　発表者　関根忠郎
　司会　谷川建司　早稲田大学

2016-11-12　第4回研究会（1日目）
山冨真治氏（前・伊丹グリーン劇場支配人）インタビューと質疑応答
　発表者　山冨真治
　コメンテーター　板倉史明　神戸大学大学院
　司会　谷川建司　早稲田大学

2016-11-13　第4回研究会（2日目）
『祇園祭』へのアプローチ
　発表者　木下千花　京都大学
『祇園祭』と『京都新聞』記事
　発表者　須川まり　奈良県立大学

2017-01-21　第5回研究会（1 日目）
小杉修造氏（元・近代映画社）インタビューと質疑応答
　発表者　小杉修造
　司会　谷川建司　早稲田大学

2017-01-22　第 5 回研究会（2 日目）
「京都文化博物館所蔵「伊藤大輔文庫」における『祇園祭』関連資料調査報告」
　発表者　板倉史明　神戸大学大学院
「時代劇スター俳優・中村錦之助の経歴から見た映画『祇園祭』製作の意義」

発表者　木村智哉　明治学院大学

2017-03-15
京都文化博物館および東映京都撮影所（および同社太秦資料室）の見学・調査

8. 共同研究会に関連した公表実績
井上雅雄「映画産業の戦後『黄金期』の実態」『立教経済学研究』第 70 巻第 3 号、2017 年 1 月
木村智哉「邦画産業斜陽期における大手映画会社経営方針の転換とその影響――東映株式会社の事例を中心に」同時代史学会 2016 年度大会「現代社会におけるナショナリズムの歴史的位相」、2016 年 12 月 3 日（土）、於、首都大学東京南大沢キャンパス

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	5 (1)	0	0	0	18 (9)	0	0	0
学内	1	1 (1)	0	2	0	28 (9)	0	16	0
国立大学	4	2	0	0	0	16	0	0	0
公立大学	2	2 (2)	0	0	2 (2)	13 (13)	0	0	6 (6)
私立大学	4	4 (1)	0	0	1	37 (13)	0	0	9 (5)
大学共同利用機関法人	2	2	0	0	2	12	0	0	9
独立行政法人等公的研究機関	1	1 (1)	0	0	0	1 (1)	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	1	1 (1)	0	0	0	15 (5)	0	0	0
計	15	18 (7)	0	2	5 (2)	140 (50)	0	16 (0)	24 (11)

※（　）内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	1(1)

※( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
『立教経済学研究』	1	「映画産業の戦後『黄金期』の実態」	井上雅雄

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

13. 次年度の研究実施計画

本年度同様、年間で 5 回から 6 回程度の、二日間の研究会を開催し、初日にはゲスト(主として映画が完成してから観客の目に触れるまでの段階で何らかの形でかかわった人を中心とする)を招いて共同でインタビューを行い、二日目には引き続き『祇園祭』に関する報告を持ち回りにて行っていく。また、三年目(最終年度)の年度内に行うことを想定している一般公開のシンポジウムの内容についても議論・準備していく。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

初年度に引き続き、2017 年度・2018 年度についても各 5 名ずつ程度のインタビュイーを研究会ゲストとして招き、三年間トータルで 15 名程度のインタビューを行い、これをテープ起こししたものを成果として公開していく。その公開方法については検討中の段階であるが、書籍としての刊行、たまはインターネット上での公開を想定している。　さらに、三年間のまとめとして、研究会メンバーによる発表およびゲストを招いてのディスカッションなどを柱とする公開シンポジウムを第三年次である 2018 年度中に計画し、その記録を報告書(または上記の書籍の一部)として公表する。